

奨励

迫害と祈り

奨励	岸本 兵一〔きしもと・ひょういち〕
奨励者紹介	日本キリスト教団大住世光教会・城陽教会・泉伝道所牧師

「あなたがたも聞いておられるとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」

(マタイによる福音書 5章43—45節)

おはようございます。ただ今ご紹介にあずかりました、岸本兵一でございます。本日は、京田辺キャンパスの近くに住む、どこにでもいるようなひとりの牧師として、テーマに沿ったお話をさせていただこうと思います。

さて、春学期の統一テーマは、案内にも印刷されていますように、「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい」とお聞きしています。学生の皆さんを前に、今日、そのことをお話しすることになりましたが、ここにおられる皆さんは、テーマに示されている「謙虚な態度で、優しく広い心で人と接する」ということを、どのように感じておられますでしょうか。どのようなイメージをもたれますでしょうか。これは、一般的に言うところの、「腰の低い人」ということでしょうか。確かに、謙虚な態度が、その人の人生において、最終的には大きな利益をもたらすことにはなるかも知れません。しかし、だからと言って、何の根拠もなしに、そのような人になりたいと、多くの人が思うでしょうか。

ヒルソングの紹介

さて、皆さん、お気付きでしょうか、ここに小さな楽器、ウクレレがあります。ウクレレはハワイの楽器なのですが、これは、携帯に便利なものですから、ジャンルに関係なく演奏できるアイテムとして持ち歩いています。今から皆さんに、開拓時代のアメリカ南東部山岳地帯のパラッドをルーツにもつヒルソングを1曲聞いていただきます。カントリー&ウエスタンと言ってもよいかも知れません。要するに田舎の歌というわけです。キリスト教信仰のエッセンスがこもった「こども向けの歌」を名刺代わりに披露させていただきます。言い忘れましたが、私は、軽音サークル「S.M.M.A.」の出身者です。卒業してからも、ギターやフィドル（バイオリン）など、なにかしらの弦楽器系を抱えていないと落ち着かない日々を過ごしておりますので、ウクレレなんぞを持参してしまいました。お許しください。さて、前置きが長くなりました。それでは、演奏してみましょう。S.M.M.A.的には、シンギング&ピッキングということになります。“Jesus Is My Best Friend”という曲です。

I' ve never seen his face,
I' ve never heard him speak,
but Jesus is my best friend.
I' ve never held his hand,
we' ve never played a game,
but Jesus is my best friend.
(ref.)

When I' m feeling troubled he is there.
Jesus goes with me everywhere.

Before I go to bed at night I tell him all my prayers.
Yes Jesus is my best friend Jesus is my best friend.

イエスは、究極の友

いかがでしたでしょうか。歌詞を簡単に訳しますと、「その方のお顔を見たことも、お声を聞いたことも、お手をつないだこともない。いっしょにお遊びをしたこともない。でも、イエスさまは、わたしのベストフレンド。やっかいなことに巻き込まれそうになっても、その方は、いつも、そばにいてくださる。夜、お休みの前、私は、なにもかも、ゼーンが、お祈りを聞いてもらうの。だって、イエスさまは、ベストフレンドだもの」。そんな感じの訳になるでしょうか。

なにかとトラブルの原因を自分の中に作ってしまう小さなこどもの日常に、自分のことを無条件に理解してくれるイエスの存在を示唆し、1日の終わりを祈りという反省で締めくくる。そのような宗教的情操を育む意図を感じていただければ幸いです。このメンタリティーが、大人になっても、社会人になってもからも継続するとすれば、自分自身の心の穏やかさは言うに及ばず、他者、すなわち、聖書が言う隣人に対しても円滑な関係が保たれることでしょう。

さて、この歌には、キリスト教信仰のエッセンスがあると申しました。それは何かと言いますと、タイトル通りのこと、すなわち、イエスはベストフレンド、究極の友ということなのです。人生の強い味方ということですね。単純明快な表現です。何を根拠にも思われるでしょう。それは、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と言ったイエスの言葉が、2000年を経てリアリティーがあるということなのです。若干の例をご紹介します。

私は、20歳代の後半、新島の末弟であった堀貞一が初代牧師であった京都北部にある丹波教会（現・丹波新生教会）の牧師を務めたことがあります。堀貞一牧師に続いて、社会福祉関係の人なら誰でも知っている2代目、留岡幸助牧師、3代目、松井文弥牧師、4代目、村上太五平牧師が活躍した草創期の出来事を教会の古老からよく聞かされました。場所や人物が特定できる表現は控えますが、明治17年、ある村の教会堂が何者かによって放火され消失しました。焼け跡に茫然と立ちつくんだ信徒の一人が、キリスト教を好ましく思わない人たちの仕業に違いないと色めき立ちましたが、他の信徒たちは、「そりゃいかん。聖書には汝の敵を愛せよと書いてある。これより、仇（あだ）のために祈ろうではないか」と異口同音に言ったと伝えられています。

信仰を落とすなよ

その後、その村の、ハンセン病を患い、村人から見捨てられた一人の男が信仰の道に入りました。ポロポロの体になり、誰も訪ねて来ることのない谷底の小屋に住むようになりましたが、3代目の松井文弥牧師は、この信徒の許に通いました。ハンセン病は、偏見の目をもって、天罰の病気、天刑病と呼ばれていました。松井牧師は、この信徒を、旧約聖書に登場する似た境遇の人物に譬え「丹波ヨブ」と呼びました。お時間のある方は、旧約聖書の「ヨブ記」を読んでください。その丹波ヨブは、松井牧師が他教会へ転任する際、「私は、このような体となり、全てを失って余命も僅かとなりました。何も持たない私ですが、前途ある若いあなたに贈るものがあります」と言って、「牧師として、これから先、どのような試練が待ち受けているか知れません。しかし、先生、あなたは、決して信仰を無くしてはなりません。私は、母からもらった『信仰を落とすなよ』という言葉を先生に餞別として贈ります」と言ったと教会誌『丹波ヨブ記』（松井文弥 日本キリスト教団丹波新生教会 1973年）に書かれています。丹波ヨブは、盲目となり、ハンセン病ですので、松井牧師の言葉を借りれば、「腐乱して膿汁を滴らす」肉体をまとう人となりましたが、死ぬまで、牧師と教会員のみならず、偏見、差別、迫害をもって自分を責めた人々を祈ったと伝えられています。それは、丹波ヨブが、あらゆる苦しみ、悲しみの究極を全ての人に代わって負われたイエスをリアルに体験していたからに他なりません。

赦さない人を赦す

古老が語った明治の信仰は、私が赴任した1976年の「現代」にも生きていました。働き盛りの息子を凶悪犯に殺害された父親とその家族との出会いがありました。この一家は、牧師を家に招き礼拝を守っておられました。その家に初めてお伺いする日、私は、古老から、「あの家の主人は、息子を殺した人を赦して、刑務所にいる犯人に面会してはるんやで」ということを聞かされました。主人夫妻と亡くなった息子の妻、そしてお子さんたちと静かな夜の礼拝を守りました。日本海への行楽の人びとが通過するだけの過疎の村に、そのような家族がありました。後日、ある場所で、この家族を特定できないように注意して説教をしたことがあります。礼拝後、会場にいたある人が、私の所へ来て、「その話は、私の郷里の人のことではないでしょうか」とお尋ねになりました。その通りであることを告げました。殺人犯を赦したその方の地域における平素の生活に裏表がなかったことを知りました。

白取春彦という人が書いた、『この一冊で「聖書」がわかる！』という便利な本があります。そのなかで白取先生は、神の愛と赦しについてこのような例を挙げておられます。「自分の身内を殺した一族が川の向こうの村にのうとうと暮らしている。その仇の家が火事になった。その時、あなたは、川を越えて、燃え盛る仇の家に飛び込んで、自分の命を犠牲にしても、憎い仇を助ける。イエスの愛とはそのような性格のものだ」（三笠書房 1998年）。

赦されているから

自分に害を及ぼす人を赦せるかどうかではなく、相当無茶なレベルで、イエスが私という人間を許容してくださっているというメッセージを聖書から読み取ることが先決です。リアリティーのあるイエス体験を通して、すなわち、私たちは、その根拠をもって憎しみの連鎖から解放され、自分も他者も自由な人となれるのではないのでしょうか。決して立派な人を教に探していくことではありません。教会には、普通の人がいるだけです。映画やドラマに登場する取って付けたようなクサイ台詞のクリスチャンやコントに登場するお決まりのコスチューム姿の神父などはおりません。実際の教会には、“Jesus goes with me everywhere.”今、歌いましたような、イエスがいつもそばに、そして、共におられるということを実感しながら、“When I' m feeling troubled he is there.”一人ひとりのトラブルと折り合い良く生活している人たちがいるだけです。焼き討ちにあった教会堂跡で迫害する者を祈った

信徒たちも、「信仰を落とすなよ」の言葉を牧師への賤別としたハンセン病の信徒も、凶悪犯を赦し、獄中を見舞った信徒も、そのような人たちでした。そのような人たちとは、普通の人、すなわち、私たちでもあるのではないのでしょうか。赦されているから赦すことを知る。リアルなイエス体験の場が備えられることを願って止みません。

2014年5月14日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録

<HPでは図表等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集 290号』をご覧ください。>